宇和の秋波にひたすやいわし雲　銀波
泥鰌かなうずめく水の五月闇　在雅
網に子を星の數かくさよりかな　百義

＊　＊　＊　＊　＊

愛す可き漁業者

空晴れ渡り、風そよ〳〵と吹く時に、際涯なき青海原の中を順風に帆を揚げて駛走する時は、如何にも愉快に且つ甚だ氣樂である併し板子一枚の下は、金輪奈落の地獄である、血に渴したる鱶も居れば、舟を覆さんとする鯨も棲む、又其鯨と相撲とる柔魚も實際存

在して居る所から見ると、此外に我々の知らぬ怪物で如何に恐しきものが居るかも知れぬ實に考へて見れば身の毛のよ立つが如き感がある、此危險極る海洋に出でゝ、吾々の爲に、食料を獲んと努めて居る漁夫達は、大膽にして放逸に、無邪氣にして深切に、而かも義氣に富み且つ俠勇に秀でゝ居る、其の恬淡洒落なる性格には、吾吾實に羨望を禁ずる事が出來ない、彼等の大膽なるは、海上の千里隈無なきを毎日眺め居るより來る、自然の大なる感化でも有らうか、大漁の時には、擧村鉦太鼓で豐年を囃し立てるが、一朝不漁で即日の食料に差支へる樣な時でも、出來得る限り有無相通じて、救濟し合ふと云ふ美風の有るのは、所謂同舟の難に殉する、平生の稼業

が之を然らしめるので有る。無邪氣にして恬淡なる彼等は、一向世事に無頓着で有る、否迂遠で有る、都人士が後生大事と袋へ入れて肌身を離さぬ實印の如きも、彼等に取つては一片の竹頭木屑の如きもの、面倒臭いから、村民の印形は、一括して村の總代へ預けて置く、若し用事が出來たならば、總代が代つて捺印をするので有る、其禁度の大なる事は、先づ我々には眞似の出來ぬ仕事で有る。彼等は斯く無邪氣なる上に、何時命を棄てるか分らぬと云ふ、稼業に從事して居る故か、其迷信の度は又非常に強く有る、神と云ひ佛と云ひ乃至鬼で有るとか靈で有るとか云へば、無暗矢鱈と之を信ずる、從つて凡ての事を誤解して堅く信じて居る事が有るけれ共、懇々と

深切に說明してやれば、又忽ちにして氷解する、素々淡白水の如く、率直小兒の如くで有るからだ。されば漁業上に於て些少の行違から、大喧嘩を始める事は有つても、話が明瞭に分れば、白雨の霽れたるが如く直ぐ止めてしもふ、又一體には喧嘩をすれば不漁になると言つて、之を好まぬ氣風で有る、これは何と云ふ美なとでないか

漁夫は斯の如く愛す可き性質を有つて居るけれ共、之に資本を放下して居る漁業家なる者は、其大膽にして敢爲の氣象に富むで居る事は、漁夫と同樣で有つても、中には己を利することに急なるが爲に、隨分陋劣なる手段を弄して、無邪氣にして此愛すべき勞働者を、苛酷に待遇する傾向の有るのは洵に以て嘆はしい次第で有

る。

最後に漁業者流の面白い喧嘩を一つ擧げて話さう、即ち或漁夫は成長した魚許りを、捕獲する事を以て任務として居る、而るに他の漁夫は、成長しない小魚を捕獲することを以て、其職業として居る、そこで前者は後者に向つて曰く、お前達は仔魚の内から無暗に捕るから、收穫が少ないので有ると、然るに後者は又前者を詰つてお前達は親魚許り捕るから、仔魚の繁殖が少ないので有る、と云つて爭ふことが有る、之は恰かも、昔時進化論の唱へられざりし時に於て、學者連中が、鳥が先に生れたか卵が先に出來たか、と云つて爭つたのと同樣で、面白ろい誤謬の論爭をやつて居るのである。

漁業者の苦心

樂は苦の種、苦は樂の種とは格言であつて、百の樂を得るには百の苦を嘗めねばならず、苦なしに居らうとすれば樂の無い境遇に甘んじて居らねばならぬ、實際其通である、併足一度漁村の中に入らば此格言は或る場合には適合せぬものかと疑はしくなる。

生命を賭して風波と戰ひ、冬は霜雪を凌ぎ、夏の炎天には船板の燒附く程なる其上に鈎を垂れ又は網を曳いて稼いで居るものは漁業者である、何程慣れて居ても生命をも賭して風波寒暑と戰ふて勞働することは決して樂な事ではない、然らば此苦に對し如何

なる樂があるか。

巧に魚を釣り上るか或は山なす程多くの魚を網で捕つた時などは實に愉快である、多數の漁業者の樂は唯此れだけである、其以上の樂は無い、漁業者の衣食住を見るに甚だ簡單であつて多くは不潔汚穢到底此中に居て樂を得る望は無い、一屋一室莚二三枚を敷くのみであつて天井もなく床もなく又窓もなし、富豪の家の犬小屋一つを建てる金があれば此の如き漁夫の家は五六軒も作ることと容易である、住居既に此の如き程度にあれば他の衣食の程度も亦想像するに難からずで有る。漁業者の生活の程度は上述の如く實に低きものなれども漁業は魯鈍なものには出來ぬものであ

る、先づ天氣を見定める事が出來ねばならず、船を操縱する術を知らねばならず、魚の性質より漁場の有樣に關する事は最もよく知つて居らねばならぬ、漁具の製作、使用法、保存法も亦甚だ緊要な事である尙ほ漁獲物處理の方法も一通りは心得て居らねばならぬ、此等の事は變化の多い事であるから概略の事だけ知つて居るにも隨分骨の折れるものである、加之當今では、磯際のみを稼いで居ては食料を買ふ錢にも足らぬから段々と遠き處を廣く稼ぎ廻らねはならぬ。

サンゴを網で採る漁業者はサンゴが網に罹つたか、岩に網がかかつたかは手答によつて直ちに區別する、此外海底に網を曳いて

カレイ、ホウボウ、エビ等を漁する者も同じく網に付いて居る網に手を掛けて見れば海底にある網の狀況を委しく知ることが出來る。

ムツやアカウやアブラボウズなどを漁するのは容易な事でない、何にしても三百尋から四百尋位もある深い海から釣上るのであつて、釣糸を延ばす事五六町以上にも及ぶ、即ち新橋から銀座三丁目の北角位までの距離に相當する此長距離に比較するとムツやアカウは實に小さなものであつて此れが鈎にかゝつたかゝらぬかは熟練したものでなければ容易に知ることは出來ぬ、此の如く深い處から魚を釣つて商賣にして居るのは他國に殆んど例

の無いことである。

深い海から魚を釣るのは品川沖などでハゼやキスを釣るのとは全く別であつて尋常の方法では駄目である、第一に五町以上もある深さの處へ糸を延ばすのであるから糸にタルミが出來易い、糸にタルミがあると魚がかゝつても知れぬから成る可く眞直になる樣にせねばならぬ、其爲に釣糸は潮流の影響を受くること少い樣に細くて強いものを用ひ、尙其先端にある重り石の上に掛石或は捨石と稱せらるゝものを加へ、其等の重量で速に海底に下らしめ、此れに達したる時は支へて居る糸の弛むに因り捨石は海底に落つる裝置となつて居る、此裝置は深海測量に行ふのと同樣で

ある、此の如き巧妙な事も漁夫自ら發明したものである。

若し魚がかゝれば五町以上も延ばしてある糸を漸々手繰るのであるが、幸な事には三四十尋も手繰れば魚はウキブクロ即ち氣胞にある瓦斯の膨脹するにより自然と水面へ浮び出る、それで糸の殘餘の分を繰入るゝには餘り力を用ひなくて濟む。

處が、どんな商賣でも損失のあるもので、漁夫が折角苦心して深い海の魚を取上げ樣とすると、さうはさせぬと云はぬばかりに、殆ど海面近くに於てアシカが横奪することが往々ある、そして其アシカは貪食であるから、一匹居れば漁船が十艘位で釣り上る位の魚は殘らず食つて仕舞ふと云ふ事である、こんな時には漁夫は總

掛りで全くアシカを養ふ爲に働く樣な事がある、實に憎むべき海獸である。

鮪の刺身に就て彼是贅澤を言ふ人は澤山あるが、鮪は如何にして漁獲せらるゝかを知つて居る人は極めて少い。鮪は流網、敷網、陷網抔にても捕れる事が多いが、長繩で捕れるのが最多いであらう、長繩とは幹繩があつて其から鈎の附いて居る枝繩が幾本も下つて居るものである、此鮪の長繩は以前は後家繩と呼ばれた程で、此漁に從事するものゝ生命を失ふ事多く、其爲に後家が多く、出來る故、左樣な名を得た譯である。

此漁は秋から冬にかけて、夜の漁であつて、東京附近では普通伊

豆七島の列よりも沖の方へ出て長十餘町に亘る繩を海中に投じ、斷へず繩の一端より他の端まで見廻り、鈎にかゝつた魚は曳上げ、餌を取られた鈎には新しき餌をかけ、終夜眠らずに働くのである、強い北風か西風の連日吹いた後の日和を待て働くのであれば海には大なるウネリが尙ほ殘つて居る、船に弱い者は血を吐く程の荒い場所である、然し此の如く難儀して働いても獲物が多ければよいが中々何時も左樣な譯には行かぬ三十九年中予の調べに出で掛けた時は日沒から日出まで働いて一尾も捕る事が出來なかつた、又一度は小さいメカジキ數尾を獲たのみであつた、而かも此漁に使用するイカは一尾十錢餘の高價にて買入れるので、一日出漁

して空戻をすれば勞力は勿論、餌料をも損するから、此事を考へれば鮪の刺身一片でも中々貴いものである。

臺網と云ふて周圍百餘間もある網を海中に沈め、此に垣網と云ふものを附け、一人の漁夫は魚見櫓に上りて常に魚群の動靜を偵察して居る漁業がある、此魚見の役は甚重大であつて才智あるものが多年の經驗を積んだ後で無ければ勤まらぬ。或時深さ約二十尋の處にある臺網の魚見は漁夫に網を起せと命じた、漁夫は起し始めたが魚の居る樣子が見えぬから、魚見に質した處、彼は海底で網に當つて魚の戻る爲に水の動いたのを確に見た、然し鮪ではない、小い魚が少し居る筈だと答へた。それで尙ほ段々と起して行つ

た處、數尾のサワラが入つて居つた、なんと恐しい眼力では無いか。

越中富山の海で辨慶鰕を目的とする手繰網を用ふるのは、深三百尋に近い海上で有つて、網を伸ばす事千尋に及び、其長い網を毎日幾回も手繰るので有るから、漁夫の青年が徵兵適齡となつて體格檢査を受けたる時に、兩手の指を交も屈伸せよと命ぜらるゝも漁夫の青年のみは指が弓狀に彎曲して居て一向に眞直にならぬ、軍醫は之を故意に伸さぬものと思ひ、大喝一聲、伸せと命ずるけれ共如何しても伸ばす事が出來ぬから、能く實際に就て調べて見ると、平生日に千尋からの網を手繰つて居る爲に、斯樣な畸形に爲つた事が分つた、未だ徵兵適齡位の青年でさへ此通りで有るから、一

生漁業に從事して居る者の艱苦察す可しで有る。

又漁夫は一般に無敎育の者が多く、敎育は又實際彼等に不用で有ると思惟する人が有るけれ共、能く其狀態を研究して見ると、實地の方に於ける敎育は中々細かい處まで行はれて居り、大に必要なので有つて、漁夫が小さい子供に實地敎育を施す事は熱心なもので有つて例へば鰹釣の盛な村では、一間位の竿の先に糸を着け、之に重い物例へば俵の如きものを結へたのを子供が持つて、玩弄物にして居る、之を弄むで居る間に、子供は不知不識重いものを釣り上げる呼吸を會得する、又臺網の盛な地方へ行けば、子供が矢張小さい臺網の格好をしたものを造り、自ら之を海中に敷込み、自

分は盥船に乘つて、魚を網の中へ追ひ入れ網を次第に繰上げて漁する稽古をして遊んで居る又船を繰縱する事に付ても、幼い時分から實地に稽古するので、五六歳の漸く手を引かれて歩るく位の子供すら、船に乘つて大きな櫓を抱へて之を漕ぐ稽古を爲し、櫓を外さずに船も幾分か前方へ進めて行くので有る。即ち漁夫には以上述べた如き實地教育が盛に行はれ今日父兄の行ひつゝある業を相續して行くには差支無いけれ共、如何にして自家の職業を進歩さすべきか、又他と比較して、自家の職業の優劣如何を判斷する丈の智識が缺けて居るから、此智識を授けたならば、日本の漁夫は慥かに今日に數倍したる進歩をするで有らう、實に日本の漁夫は

他國の漁夫と比較して非常に多くの特長を有して居るのである、例へば潛水するにしても、潛水器を被れば殆んど四十尋の底までも潛る、外國人に在つては、斯る事は命知らずの爲す事で有ると言つて、容易にする者が無い、日本の漁夫は斯の如く仕事に巧者で、冒險敢爲の氣象が有るけれ共、前申す通り實地に付ての教育のみで、理論上の智識が無いのは甚だ遺憾で有る。青森縣津輕郡の鰺澤と云ふ處に、盲目で漁夫をして居る者が有る、彼は海上に出でゝ櫓も推せば、釣もする、而も其櫓を押す數に依て、船が進行した里數や、沖へ出た具合を知り從て舟へ風を受ける程度を知つて居る、實地に就て得たる習慣も亦馬鹿には出來ぬ、併し斯の如き事は、盲人でも

出來るから容易なる事で有ると思ふ勿れ、彼は非常に感覺強く、單に漁業のみならず、産婆の代りもすれば、鍼までもする位器用であるから、常人でさへ困難とする漁業に熟練して居るので有る、之はほんの珍らしい一例を擧げたので有るが、要するに日本の漁夫は、實地教育のみ發達して居つて、理論的の智識が無い、

貧乏な烏賊の黑みに片小涙　沾德
手を切ていよ〳〵憎し鰒の面　其角
あら何ともな昨日は過ぎて河豚の汁　芭蕉
積かされて歌のかきたき比目魚かな　旭翁
鯛おそしひらめに霞む花もがな　信稻

漁業の危險と其保護

漁業は漁獲不定の爲に損毫を受くるのみならず、又種々の遭難があつて、其爲に蒙る害は尠なくない、其内最も悲慘なのは、波風或は霧抔の爲に生命を喪ふ事で有る、之は何國にも有る事だが、日本では其遭難の比例が殊に多い樣である、之は餘程研究して注意しなければならぬ、暴風の時に沖へ出て居ると、吹き捲くられて船が傾き水船となり、或は顚覆し、或は破壞し、若くは大洋へ漂流する事抔多い、又北海に多く有る、霧の爲に方向を失ふて歸る事が出來ない事、又は更に北方に行けば、流氷の爲に害を被る事がある、斯樣な

危害は船體を大きく造れば免るゝ事が出來るかと云ふに、夫は駄目である、何となれば、船體を如何に大くするも、其大船より直接に漁具を出して、漁獵する事の出來ぬ場合が多いから、更にボートを下ろして、漁をしなければならぬ、而もボートを用ふれば其危險は甚だ多い、然らば之に對する救濟の方法は、如何すれば善いかと云ふと、何等かの方法を以て、本船の所在を知らすのが第一で有る、或は本船で鉦を鳴らし、或はラッパを吹き、若くは太鼓を敲いて、夕暮又は霧の時分にも分る樣にするけれ共、人間の肺の力で吹く音響は小さいのみならず、長く續かぬ、又鉦や太鼓も、獵場の範圍全體へ聞えぬ、殊に風に逆つては音響の達する距離が極めて短かい、更に

大砲抔を用ゐたならば、効果が多いかも知れぬが、之は費用が多くかゝるのみならず、砲其自身に依る危險も少なくない故、容易に行はれぬ、又夜間は燈光を利用する事も有るけれ共、波風の荒れる時、霧の深い時抔は、十分の結果を見る事が出來ぬ、之を救濟するの良法は大に研究す可き事で有らう。其他ボートが本船を離れて感ずる困難は食物の缺乏と方向の不明で有るから、沖へ出た舟、又は沖で本船を離れて仕事をするボートは、成可く食料及磁石は、平生より備へて置く必要が有る、其食物もビスケット抔の如く、直ぐ食する事の出來る物を貯へるのが善い、又此等漁船の遭難を防ぐの手段としては、食物及磁石を備へるの外、現今の如き漁船を改良する

ことが最大の急務で有つて、之は前に述べた通りで有る。

以上は大なる損害の場合のみを述べたので有るが、更に小なる危難災害に到つては、實に數へ切れぬ程有る、例へば船中で働いて居る間に、帆桁が落ちて怪我したとか、或は暴風雨の時に火を焚いて暖を取る際、其火で火傷をしたとか、或は船の帆網漁具等の爲に脚を取られて海中へ浚へ込まれたとか、悲慘な事は極めて多い、又更に進んで小さき事まで詮議をして見れば、引き上げた網の内に入つて居る魚類や其他のものゝ爲に思はぬ怪我をする事も有る、水母やニラ(學術上管水母と稱せらるゝもの)に刺されて毒を受ける事、又は魚類中で毒の有るアカエイ、オコゼ、江戸ミズゴンズイ(鯰

の形せる魚、市場に上らさる故、江戸見ズと名づく)抔の取れた時に知らずして之に手足を觸れて劇烈なる毒を受ける事が有る、其外海中へ潜つて鮑等を取る者は介の鋭利なる緣、ウニの棘等の爲に傷を受けることもあり、又た沙魚の爲めに食はれるとか、鯨を捕る獵夫が鯨の爲に舟を覆へされるとか、或又小舟で漁獲中に大帆船や蒸汽船が來て衝突し、若くは網を其船體や柁抔に引掛けて、破られる事抔珍らしからず、殊に海峽では、魚の通過する道と舟の航行する道とが同一であるから、此等の危險は甚だ多い。

漁業者も自身に寒暖計晴雨計抔を備へて置いて、天氣が變り想ならば、早く之を避けるの工夫をするがいゝけれ共、彼等は不注意

にも、今少し此魚を捕り終つてから歸らう抔と、慾を懸けて居る爲に、不測の災害を被る事が有る。蓋し何れの漁村でも、漁夫等が何季節の何漁には何處へ行くと定まつて居つて、不意の天候變化に遭ふ時には何の方面の漁夫が危ういと云ふ事抔は、略推察が出來るから、斯の如き場合には、猶豫なく砲艦とか驅逐艇とかを、其場に急行せしめて救濟する事にしたならば、我々の爲に食料を獲んとて大海へ乘り出す漁夫等は、怯めず臆せず沖の方へ出て大漁を爲し、廉價にして新鮮なる魚肉を我々に供給する事が出來るで有らう。一體漁業を保護し監督して、之を發達せしむる事には、餘程海軍の力を藉りなければならぬ、獨逸皇帝は我々の將來は海上にありと

言はれた程あつて獨逸政府では砲艦を出して絶えず自國の漁船の赴く漁場を周遊せしめて漁場の保護監督を努めて居り、獨逸以外の國に於ても、亦同じく漁業者を保護する事は、軍艦の平時の任務の一つとして居るので有る、然るに或國では、曾て水雷艇が漁夫の建て廻して居る網を、突き切つて通つたと云ふ話さへ有つた位で、其漁業に對する注意の程も、又此に關する智識の程も他國の夫の如く周到懇切では無いらしい、漁業者共に於ては、現在漁業に從事して居る漁場から、更に一里も沖へ出れば、澤山の漁獲が有るに相違無いと知りつゝ敢て出る事が出來ないのは、即ち萬一の場合に對する保護者が無いからで有る回游魚類を目的として居る漁

業者は其回游區域を知る爲に大に困難をする故に余は冀ふ、將來軍艦や商船抔の大船が沖を通過して、魚群の麕集して居るのを見たならば、港へ入つて直ちに最寄の役所或は漁業組合か水産組合を通じて漁夫共に報知して遣り、又其出漁した際には何處迄も之を保護してやる道の啓けん事を。

實際又魚の種類に依ると、何の場所にも居ると云ふ譯には行かぬ、一定の場所以外には之を見出せぬものが有る、例へばムツの棲むで居る場所等は、全く一定して居つて、其區域以外には居らぬ、而るに漁業の有樣を知らぬ者は、魚は何處でも海中でさへ有れば捕れるだらうと云ふ風に、漠然と考へて居るから、折角の好漁場で以

て漁業して居るのに其近傍で、此に邪魔な仕事を始めて權柄突で漁業者を追退けたり、若くは自家の一時の都合の爲に、漁場を荒らす事が有る、海は素より漁業者の所有では無いけれ共、因襲の久しき、殆んど所有の樣に爲つて居り、斯る場所に對しては法律も亦其專用漁業權を認めるので有るから、出來る丈之を邪魔せぬ樣にして貰ひたい、之は漁業者の爲許りで無い、魚を需要する事最も大なる日本國民の爲で有る。又土木事業や諸工業の爲に、漁業に損害を及ぼす事が有る、殊に水路を變更する土木工事抔は、大に漁業に影響するもので有るから、斯る場合には、必ず一應漁業との關係を調べ、害のない方法、又止むを得ぬ時は出來る丈害の少い方法を考へ

なければならぬ。其上に彼のムッの漁抔は、冬から春へ掛けてのみの漁で有るから、完全に業をすることの出來る日は、月に三四日より無いから、彼等は即ち一日働いて十日間家族を養はねばならぬ時期で有る、此貴重なる時日を、他から邪魔せられたならば、其損害は實に莫大なるもので有る事を察しなければならぬと思ふ。漁業の利益は決して陸上の利益に劣らぬもので有る、場所に依ては、又時に依ては、遙かに陸地以上の利益を擧げる事が有る、現に海苔、牡蠣抔を養殖する場所は、陸上の田地よりも高い値段で賣買するのが在る、されば單に國家の利益の點のみから見ても、漁業は大に保護奬勵しなければならぬもので有る。

漁業と文藝

海洋は茫々として曠いもので有る、一葉の扁舟に乘り出して漁業をするのも勇ましいもので有る、と云ふ事は文學者も昔から感じて居つて、その感想を詩歌文章に述べたものが昔から多いけれ共、其實際に當つて見たる經驗が少ないから、多くは想像に走つて事實に遠ざかつて居る、畫工彫刻家抔も亦た、實地に海洋や其内に棲息する魚類に接した事が稀であり、單に海濱の模樣や肴屋の持て來る魚を見て變化極無き海洋と活動する魚類とに就てデザイ

ンするから、事實の眞相を失する事が多い。

我邦の繪畫で風の方向、雲行、波の形狀柁の取り樣、帆の掛け具合等の關係を正しく描いたものは無い、又鯛が海を游いて居る處、鮎が淺瀨を走つて居る處又は鯉が瀧上りをして居るところ抔を能く書いて有るけれども、其の鰭の動き具合、其の背骨の曲け樣、魚體の色合周圍との關係抔時に應じ處に準じて正鵠を得たものは甚だ少ないと見て居る。

蓋し魚の畫をものする時には、其鰭の動き具合を、描寫するの巧拙のみに依ても、作品に餘程の甲乙が出來るもので有るから、畫家彫刻家抔は、此點に注意したらよからう、又海の深淺、潮流の具合抔、

其他種々の海水の性質や場處如何に依て、之に棲む處の魚類が異なつて居るけれ共、此等に就ても一向考が乏しく、同じ場所に棲息することの無いものを、同一の額面に寫したり、又深い海で、植物も生育せず流れも無い處に海藻繁茂し波濤の掀播して居る樣を描き海底の有樣を畫くに背景を明るくしたり又は光線の乏しい深海の底を、二三尋位の淺瀨の樣に書いたりする抔、先づ畫としての根本の價値を、失ふて居ると言つてよいものが有る。文章詩歌にしても其通で、大海濤鳴月照營と言つた樣な雄大なる叙景と波靜かにして吹く風も枝を鳴らさぬと云ふ樣な雍和なる風光を描寫するのに、其間に截然たる區別、明瞭なる特徴を表はして、此場合は成

程斯る現象が起るかと、人をして感歎せしむる樣な、實物寫生の研究に力を入れる者が少ない。

我邦で最も普通に見る蛭子の像を見ると左脇に鯛を抱き右手に釣竿を握つて居る、然し實際鯛を釣るには竿を用ふることは殆と無い、何時何人の畫き始めたるか知らねど漁業の實際を知らず鯛釣も鮒やハゼを釣ると同樣に行ふものと考へたのであらう、但九州の或村で見た蛭子の石像は古いものであつて兩手で鯛を抱いて居るもので釣竿は持つて居なかつた。

裝飾模樣も昔から浪、ミル、介盡し、鯉位までは利用して居るが、海と魚とに關したものは至て少く、陸上のものが大部分を占めて居

る、然し面白い新奇の材料は海の方に澤山ある。

斯の如く實際に相違した作品を出して藝術家が本領を得たりとして居るのは、恰かも落語家が蒲鉾と云ふ奴は、背に板を負ふて水中に游いで居ると云つて、人を笑はせるのと同じく、事實全く相違したる事を、得意然と公衆の眼の前に晒らすもので有る、藝術專門家たる彼等でさへ斯の如しとすれば、一般國民は、何に依て其の實際の狀況を想像し、又趣味を感知することが出來やう、今や我が國民生活の根本たる、動物質の食物は、其の大部分を海中に仰ぐの時に當り、海や魚に關する國民の智識が、斯の如く淺薄幼稚で有つては、寔に嘆はしい次第では無い歟。

海と魚

終

明治四十二年八月二十日印刷
明治四十二年八月三十日發行

定價金四拾五錢

著者　岸上鎌吉
東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　市川七作
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所

海と魚奥付

著作權所有

發兌元　博文館
東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番

農學士 塚本道遠君　農學士 井上正賀君
共著

改訂增補

水産學

全一冊洋裝菊判紙數三百四十頁
並製正價金四拾錢　郵税八錢
特製正金五拾五錢　小包八錢

（目次）

▲總論○海の獸類（アサラシ、ガツトセイ、アシカ、セイウチ、ラツコ、眞甲線、鰯線外七項）○龜類（スツポン、アヨウミガメ外三項）○魚類（總説、鯛、黑鯛、スヾキ、アラ、ムツ、イサキ、イトヨリ外廿數項）諸種の海産動物（蝦蟹類、章魚、烏賊類、介類、ウニ類、ヒトデ類、ナマコ類、珊瑚類、クラゲ類、海綿類）○海産植物總説（地盤と海藻、海藻と光線、海藻と溫度、海藻と鹽分、海藻の形狀、根、莖、葉、色、海藻の營養、海藻の生殖法、海藻の効用、海藻減少の理由）○海藻の種類○漁撈法（漁船、漁具、網具、抄網、掩網類、曳網類、旋網類、敷網類外數項）○水産養殖法（鮭の養殖、鯉の養殖、稻田に鯉の飼養、ボラの養殖、鰻の養殖、泥鰌の養殖、金魚の養殖、鼈の養殖、牡蠣外十四項）○水産物の貯藏十數項○水産動植物の製品二十數項○水産物の利用二項○水産食品の滋養價値二項○水産業と海洋外數項○水産業と天候

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

（二）

理學士 飯塚啓君著

海産動物學

全一冊洋裝菊判總クロース
美本紙數七百二十頁
正價金貳圓
小包料金拾貳錢

本書題して海産動物學と言ふ其論ずる所は地球上海洋の分布及び海洋の狀況潮の干滿並に海流等より始まり次に其海洋中に棲息する動植物相互の關係及びプランクトン等に就て述べ更に進んで海産の動物を自然分類法の順序に從ひ漸次下等のものより高等のものに說き及ぼし例へば主として本邦所産のものを採り其構造習性等は勿論屢々其生殖發生等を記し以て海洋中に産する動物生活の一般を知らんと欲する人々に資せんとせるものにして添ふるに彩色圖版寫眞銅版數葉亜に繪巧なる木版二百個以上を以てせしもの紙數約七百二十餘頁なり我が海國生活の人士は須らく本書を繙讀して實驗應用の資に備へらるべし

發兌元　東京本町　博文館

理學士 遠藤吉三郎君著

日本有用海産植物

全一冊洋裝菊判總クロース
美本紙數二百二十八頁
正價金壹圓廿五錢
小包料金八錢

（三）

毎編專門諸大家講述

學藝叢書

本書筆を執るの士は皆む思ふに科學的思想の幼稚なるは邦人の通弊なり而して之が普及を圖るに適する書籍の刊行乏しきもの實に其一因たらずや本館茲に見る所あり遂に各斯道專門大家に乞ふて本書を發行せしが逐次刊行今や漸く**全部**を**完成**せり其の萬有科學に向て貢獻する所豈尠少ならんや江湖の諸君乞ふ愛讀の榮を給へ

全部十二冊（洋裝菊判美本紙數一冊二百頁以上毎編口繪寫眞版及密圖數十個挿入）

正價（一冊金四拾錢郵稅一冊六錢　六冊金貳圓廿錢　十二冊金四圓廿錢）

趣味實益兼備のものたらしきもの

全部目次

第一編　人類學叢話　理學博士　坪井正五郎君講述

○廣く人類を見よ○人種○何をか人種の別と云ふ○諸種族相互の系圖的關係を考へ定むる法○諸人種に於ける衣食住の比較的價値○野蠻未開人種の智慧○事物變遷の研究に對する人類學的方法○玉を好む風○玉飾りの起原○進物に添へる「のし」の變遷○土俗器物○古墳調査は如何なる點に於て人類學上如何なる利益あるか○古代石器時代の遺跡實査は人類學上の興味○日本最古住民に關する豫察と研究○人類起原諸說○人類眞正の性質○諸精査○人類起原諸說に關する諸意見○諸種の雜誌に掲載されたる人類に關する諸意見に就て如何にせば人類學を自信し得べきか○人類研究者の幸福

第二編　植物學叢話　理學博士　三好學君講述

○植物と美術（緒言、美術寫眞畫、美術的標本畫、普通美術畫、植物畫の練習、植物圖案）○天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て（本論の主意並に天然紀念物湮滅の原因、世界各國に於ける固有植物並に其絶滅の危險、外國に於ける保存すべき植物の種類、結論）○圓藝と學理○植物體に於ける水雪の影響○植物と降雨○紅葉の話○梅の生態

第三編　水産叢話　理學博士　岡村金太郎君講述

本邦養魚沿革事蹟○海外養魚沿革○海中に於ける窒素の淵源○洪の性質と飼育○水産學の範圍○洪と日比谷公園○神馬藻と昆布○寒天の用途○寒天の製法○ところてん寒天の歷史○テングサの採集○過度に通氣したる水の魚類に及ぼす影響○魚類分布の一斑

第四編　動物學叢話　理學博士　石川千代松君講述

○進化論○精蟲の話○生物の生活は自愛か他愛か○動物の子守○動物卵の大小及び數○蛋の夫婦○昆蟲の變態と露國の刺客○蝙蝠の話○サルに就ての學問○魚類と磯巾着○獅子の話○目の話○龍と云ふ名に關係ある動物○鯢魚の話○蛇の話○馬の話○ロイスマン先生の逸事○濠洲雜話○羊の種類○麒麟の話○烏と果實○濠洲土産外數項

第五編　歷史叢話　文學博士　箕作元八君著

國民の發展と海事との關係○歷史上より見たる道德の危機○西洋に於ける封建制度と武士道との起原沿革○國民將來の理想○ナポレオンの露戰爭の史的意義と國民將來の覺悟○日レオン一夕話○古代の文房具○四千年前の青年時代○ナポレオンの玩具○チルソンの青年時代○アーサー翁物語○少年と歷史

理學博士　松村任三君講述

第六編　植物雜話

目次
○植物學を學術的に學べ○我國の園藝と公園○紅雪○蕾○樺太の植物○水仙の話○蠟梅の話○紅葉○葬の話○百合の種類○木莫莨の種類○秋の野の草○西洋の植木屋○日本の園藝○初めての植物採集○事大主義を免れざる國語▲附錄　花菖蒲○顯微鏡の話○少年と植物

文學博士　上田萬年君講述

第七編　國語學叢話

目次
○二十世紀に於ける國語の地位○桓武帝の話○演劇上の言語○戲曲に現はれたる武士道と大和魂○現今の作文教授法に就て○予の好める人物○內地雜居後に於ける語學問題○教育上の雜觀○西國の留學生に就きて

理學博士　神保小虎君講述

第九編　地理學叢話

目次
○外國語速成術○地理學者にアイヌ語の勸め○ローマ字變革論○探檢旅行者の經驗○二日間に箱根の遠足○信濃旅行の雜記○支那巡りの俗話○ポルテオ外二島巡見雜話○ポルテオ島蠻王の家○ジヤバ島の話

理學博士　鶴田賢次君講述

第十編　物理學叢話

目次
○目分量の誤差○山紫水明の理○生ま卵と煤で卵○水の景色○扇子の構造○▲雪の華○理學研究雙六の遊び○野球の飛揚○覽鏡の理○顯微鏡以上の微と物質の結構○自叙傳ヘルムホルツ

理學博士　今村明恒君講述
理學博士　神保小虎君講述

第十一編　地文鑛物叢話

目次
▲地文の部○市街地に於ける地震の損害を輕減する簡法○震災輕減問題の一二に就て○地震現今の進歩○津浪の話○赤潮の話▲鑛物の部○石の鑑定法○鑛物鑑定法の初等實驗○石油の話○溫泉の話○山崩れと地割れの原因○カラットの地質探檢

工學博士　寺野精一君講述

第十二編　海事叢話

目次
○軍艦の話○潛航水雷艇○海上に於ける日本の活動○軍艦の進歩○商船と軍艦○軍艦防禦の變遷

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番　博文館

石井研堂君著

釣遊秘術 釣師氣質

全一冊

洋裝菊判表紙羅紗紙美本紙數七百七十五頁寫眞版八頁挿入（精巧美麗）

正價 九拾五錢 小包料拾貳錢

目次

上卷――釣遊文章　○元日の釣○寒鮒の大釣○野つり○池の鮒釣○五月の鯉釣○雨中の鱚釣○おぼこ釣○中川の鱸釣○品海の赤目魚釣○利根川の鱸釣らずの記○沙魚乘合船○暴雨紀念日外百數十項

中卷――雜著　○鯉魚の舞○白魚網○蟹捕と蟹賣○鮒の孕卵の實査○品海の汐干狩○突き船○競爭釣○品海の網漁○釣具類の小細工○釣餌類○ハイカラ釣○工兵爆發藥○東京市驅逐中の釣○職人の內證釣○某女史に代つて○異名同魚○釣書解題略○釣客列傳

下卷――釣魚術略　○釣具○釣の餌○天候と水○釣場○釣客須知○釣法の名義（浮釣法―沈釣法―叩き釣法―置釣法）○河釣類（鯉釣法―鮒釣法―手長蝦釣法―おぼこ釣法外數項）○海釣法（鱚釣法―小黑鯛釣法―赤目魚釣法―鰯釣法―沙魚釣法―針魚釣―なご釣）○研堂規約○附錄　索引

滿尾藤次郎君著

漁魚術

全一冊

洋裝小判美本

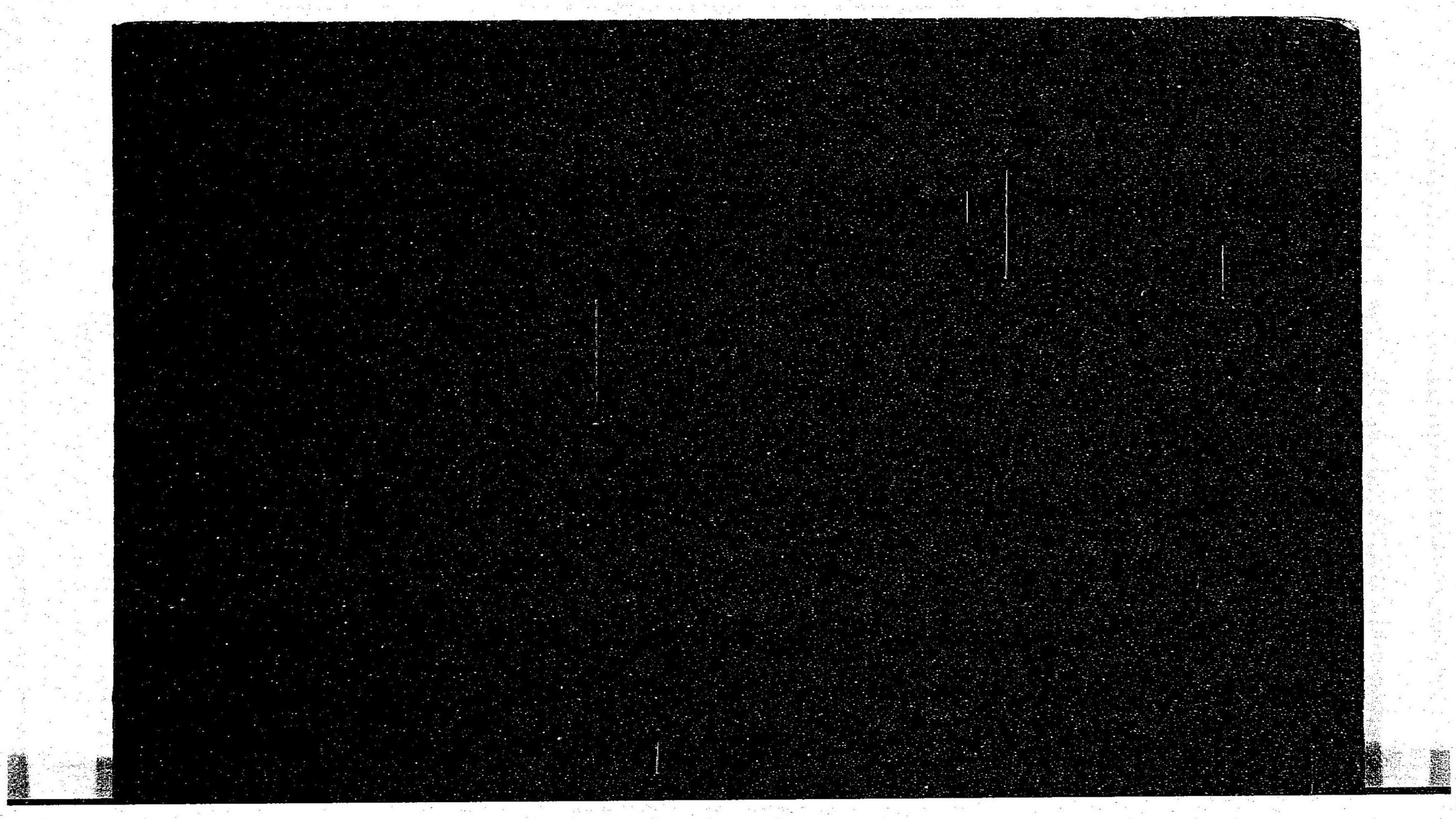
賣價 金八錢

郵稅 金貳錢

發兌元 東京本町 博文館

37

88
318



057434-000-6

88-318

海ト魚

岸上　鎌吉／著

M42

CAR-0002